

公文国際学園中等部 3 年生を迎えて

追手門学院大学上方文化笑学センター所員・国際教養学部講師 広瀬 依子

2020 年 12 月 10 日午後 2 時から午後 4 時まで、公文国際学園（神奈川県横浜市）中等部 3 年生 28 名が当センターを訪れた。同校は中高一貫教育を行っており、中 3・高 1 の 2 年間で「充実期・グリーンゾーン」と名付けている。目指すのは「視野の拡大」「主体的な学びの姿勢の確立」だという（同校パンフレットより）。その一環として現地へ出向く企画「日本文化体験」が設けられている。今回来訪の生徒さんたちのテーマは「笑いで人を幸せにする」。笑いを今とは違う方法で役立たせたい、そのための方法を探したい。また、大阪の人のフレンドリーさを実際に体験したい等の趣旨のもと、3 泊 4 日で関西圏を巡る中、センターも来訪先のひとつになったというわけだ。

会場は総持寺キャンパス A131 教室。センターからは高垣所長、辰本所員、広瀬所員の 3 名が出席した。センター・中学生とも参加者全員が互いに距離を取り、消毒を行い、マスクを着用し、新型コロナウイルス感染拡大防止策をとった上で開催した。

まず初めに、高垣所長、辰本所員、広瀬所員がそれぞれ自己紹介を兼ねてセンターと各自の研究について述べた。その後、参加した生徒さんから質問を募り、それに回答するかたちで進行していった。

この質問内容と傾聴・発言姿勢の優れていることに、われわれ 3 名は大きさではなく驚嘆した。こちらの発言時にはじっと耳を傾けて意識を注ぎ、メモを取る。自らの発言時には内容をコンパクトにまとめてわかりやすく話す。本当に中学生？ 高校生ではないのか？ と、思わず書類を見返したほどである。

その質問内容の一部をご紹介します。

- ・ 関西人は生で漫才を見ることが多いと聞く。笑いが将来に与える影響はあるか。
- ・ 昭和の笑いとは近年の笑いを比べて、近年の笑いをどう評価しているか。
- ・ 笑学研究を始めて、笑いに対する意識は変わったか。
- ・ センターが行ったアンケートの分析に「言葉に興味を持ち、人に興味を持ち、自信を持てるような教育方法を考える必要がある」と書かれていた。具体的にどんな教育方法があるか。
- ・ 海外の笑いには叩く文化がないが、なぜ日本にはあるのか。
- ・ 世界に何かを発信する時、笑いが壁になると思う（筆者註・どんな言葉や状況が笑いを呼ぶかは、国や民族によって違うため）。どうやって乗り越えたらよいか。
- ・ 人を傷つける笑いとはそうではない笑いとの線引きはどこか。
- ・ 笑いは「変」でもある。笑いとは恐怖につながりはあるか。

こちらがたじろいしてしまうほどの鋭さを秘めた質問もあり、大いに刺激をいただいた。コロナ禍でなければ、たとえば生徒さんを 3 グループに分け、所員が 1 人ずつ参加して少人数での意見交換ができたかもしれないと考えたと残念である。しかし、この状況下、関西まで来訪されたのは嬉しいことであった。

後日、生徒さんと引率の先生からいただいたお礼状によると、今後、笑いをテーマにした論文を各自でまとめられるとのこと。今回の訪問が、さらに考察を深める一助となるならば嬉しい限りである。